

家庭内感染が疑われた *Microsporum canis* による皮膚真菌症の一例

◎奥村 将太<sup>1)</sup>、山本 優<sup>1)</sup>、大崎 裕介<sup>1)</sup>、武井 佑未<sup>1)</sup>、深田 多紀子<sup>1)</sup>、繁原 矢枝子<sup>1)</sup>、山本 恵子<sup>1)</sup>  
豊橋市民病院<sup>1)</sup>

【はじめに】真菌感染症の確定診断は難しく、日常検査で原因菌種を特定できないケースも少なくない。今回、皮膚真菌症が疑われた患者から真菌を検出し菌種同定を行い、感染源の推定および同様の症状を示していた家族の治療に有益となった一例を経験したので報告する。

【症例】2歳男児。頭部の脱毛、頭皮に膿疱、痂皮形成を認め、頸部にも膿疱を伴う痂皮および全体紅斑あり。以前より患児の姉にも頭部に同様の症状を認めており、他院にて抗菌薬と抗真菌薬が処方されたが、症状は悪化傾向で当院に紹介受診されていた。家庭ではネコを飼育しており動物との接触歴があった。患児の培養検査で糸状菌が検出されたため、患児および姉に対しイトラコナゾール内服による治療が開始され、症状の改善傾向が見られた。

【微生物学的検査】頸部皮疹生検材料の培養検査が提出され、一般細菌培養および真菌培養を実施した。培養7日目にサブロー寒天培地を観察したところ白色綿毛状で放射状の集落を認めたが、ラクトフェノールコットンブルー染色による鏡検では形態的特徴に乏しかった。培養14日目

に観察すると集落は巨大化し、鏡検では区画のある紡錘形の大分生子が観察された。培養集落を用いて MALDI Biotyper (BRUKER) にて測定したところ *Microsporum canis* と同定された。また、姉の毛髪による直接鏡検および培養検査では真菌の証明はなされなかった。

【考察】*M. canis* はネコやイヌの白癬の原因菌種であり、感染動物からヒトへ感染する。今回、飼いネコに脱毛症状がみられており、ネコが感染源であったと推測された。感染拡大の防止には感染源の推定は重要と思われる。本症例において糸状菌の検出および菌種の同定ができたことで、家庭内感染が疑われた同症状の家族にも適切な治療を行うことが可能であったと考えられる。日常的な真菌培養検査では菌の発育を確認できた場合でも菌種の確定まで至らない事例もあることが実情だが、可能な限り詳細な結果報告を行うことが大切であると思われた。

連絡先：0532-33-6111（内線 2227）